

ヒップホップダンスのランニングマンにおける評価項目の作成

杉田 美瑛¹⁾, 杉浦 宏季²⁾

Construction of assessment items for the hip-hop dance step “the running man”

Miei SUGITA¹⁾, Hiroki SUGIURA²⁾

Abstract

Many physical education teachers are uncomfortable assessing dance techniques and performance; hence, a simple method of assessment using common understanding is needed. This study aimed to examine standard assessment items to easily judge the achievement of the hip-hop dance step “the running man.” After determining 25 assessment items, the χ^2 test was evaluated by 20 dance professionals familiar with the running man. The reliability and objectivity of each item were evaluated by assessing the technique of 50 people. Reliability was examined by two evaluations of one tester (test-retest method), and objectivity was examined by assessing two testers. The agreement degree of the evaluations was studied by the κ coefficient. Four items (arm movement, leg slide, rhythm, and clarity of step) had moderate or high κ coefficients. In conclusion, it was judged that the above assessment items were effective in easily evaluating the technique of a dancer performing the running man.

多くの体育教員はダンスパフォーマンスの評価に不安を抱えている。よって、誰もが共通の理解を有する評価項目の作成が求められる。本研究の目的は、ヒップホップダンスにおけるランニングマンのステップの成就を簡便に判定しうる評価項目を検討することであった。内容的妥当性を検討の上、選択した25項目について、ダンス経験者20名を対象に適否を χ^2 検定により検討した。さらに、50名のステップの評価により各項目の信頼性および客観性を検討した。信頼性は、検者が被験者を2度観察し（再テスト法）、客観性は、検者2名が被験者を観察し、評価した。評価の一致度は κ 係数によって検討した。その結果、4項目（腕の動作、各脚のスライド動作、リズムキープおよびステップの明確さ）の κ 係数は中程度以上であった。結論として、最終的に選択された4項目はランニングマンのステップを簡便に評価する上で有効と判断された。

Key words : Dance step, Reliability, Objectivity

キーワード : ダンスステップ, 信頼性, 客観性

1) 福井工業大学大学院 工学研究科
2) 福井工業大学 スポーツ健康科学部

1) Graduate School of Engineering, Fukui University of Technology
2) Faculty of Sports and Health Sciences, Fukui University of Technology

連絡先 杉浦宏季

福井工業大学 スポーツ健康科学部
〒910-8505 福井県福井市学園3-6-1
E-mail : sugiura@fukui-ut.ac.jp
電話 : 0776-29-2583

1. 緒言

2012年に中学校の保健体育におけるダンスは必修化され、今日まで多くの生徒が身体表現活動を経験してきた。ダンス必修化の背景として、「体を動かすことが、身体能力を身に付けるとともに、情緒面や知的な発達を促し、集団的活動や身体表現などを通してコミュニケーション能力を育成することや、筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合う活動などを通して論理的思考力を育むことにも資する」ことを重んじる基本方針が挙げられる(文部科学省, 2017)。文部科学省(2017)は、ダンスを「イメージをとらえた表現や踊りを通じた交流によって仲間とのコミュニケーションを豊かにすることを重視する運動で、仲間とともに感じを込めて踊ったり、イメージをとらえて自己を表現したりすることに楽しさや喜びを味わうことのできる運動」としている。つまり、ダンスを通じた表現活動は、コミュニケーション能力の向上や自己表現能力の向上に繋がると解釈される。加えて、子どもの発育発達においては、姿勢の改善(石川, 2013)やバランス能力の向上(Chatzihidiroglou et al., 2018)等の効果があり、他にも、模倣が羞恥心を払拭する(安達と八木, 2017)といった報告もある。

体育におけるダンスの授業の問題として、田中(2016)は、教員の知識、技能、および指導力の不足、学校の指導体制の不備、授業に関する参考資料の不足などを、北島ら(2018)は、女性教員が中心に指導していること、7割以上の男性教員にダンスの指導経験がないこと、学習指導要領に示されている学習内容の実施や目標の達成が実現できていない可能性があることなどを挙げており、教師や学校側の問題が多いと解釈できる。また、生徒は表現活動に羞恥心を感じやすく、有能感や達成感が得られない場合、その活動に嫌悪感を抱き、体育嫌いに発展することが問題視されている(春日ら, 2017)。つまり、体育教員が生徒を適切に評価できず、成熟度を高めさせるダンス指導が提供できなかった場合、生徒のダンス嫌いは体育嫌いに悪化し、教育の本質である「生きる力の育成」にまで悪影響を及ぼす可能性がある。しかし、学

校体育におけるダンスに明確な評価基準はなく、受講態度や生徒の自己評価を用いることが殆どである。この背景には、ダンスの経験が乏しい教員が指導に携わっていることが関与しており、このような体育教員は、定性的評価が主であるダンスの授業に不安を抱えている(山口ら, 2017)。

以上のことから、誰もが共通の理解を持ち、評価ができるような指標が必要である。これが作成できれば、前述の問題は改善できる可能性がある。しかし、新たな指標を作成する際には、妥当性や信頼性、客観性を考慮する必要がある(出村, 2007)。つまり、妥当性の高い各項目に対し、同じ評価者が異なる日に、あるいは異なる評価者が同じ日に評価した場合、どの程度同じ評価が可能か検討する必要がある。今後、人工知能(AI)が発展すれば、採点競技はコンピュータが評価できる時代になる。すでに体操競技においては技の成熟度を評価するシステムが開発されている(久保と山口, 2017)。誰もが判断できるダンスの評価基準(ループリック評価表)が完成すれば、AIのプログラム作成にも貢献できると考える。

当初、ダンスの授業では「創作ダンス」および「フォークダンス」が実施されていたが、平成10年以降、「現代的なリズムのダンス」が加えられた。文部科学省(2017)は、「『現代的なリズムのダンス』は振り付けのあるダンスを模倣するのではなく、ロックやヒップホップなどのリズムの特徴をとらえて自由にリズムに乗って踊るのがねらい」と述べた上で、「振りや順番が決まった踊りを模倣するだけという指導は望ましくない」と提唱している。体育授業におけるダンス種目の採択率を検証した中村(2013)によると、中学校では男女問わず過半数がリズムダンスを実施しており、その理由として、「生徒の興味・関心が高いため」や「生徒が主体的に活動するため」としている。つまり、生徒が実施したくなる、成就できたら嬉しい、そのようなリズムダンスを選択することは、ダンスへの興味・関心を高めさせる上で重要であり、その後、文部科学省(2017)が提唱する「自由な踊り」に移行することが重要と考えられる。

近年、多くの若年者に人気があるストリートダ

ンスには、様々な基礎ステップが存在する。例えば、ボックスステップは、立位姿勢の状態から四歩で四角形を描くように片脚ずつ交互にステップを踏む動作を反復する。クラブステップは、つま先、および踵を外側と内側に交互に反復する動作であるが、左右で異なる動きをすることやつま先と踵の体重移動の仕方が複雑であることから、前述のステップよりも難度は高い。また、ヒップホップグループが流行させたランニングマンのステップにおいては、その場ステップに上半身の動きが伴うため更に難度は高くなる。本研究の目的は、ストリートダンスのジャンルの一つである「ヒップホップダンス」の動作の成就に着目し、ランニングマンのステップにおける評価項目を作成すること、ならびにそれらの信頼性および客観性を検討することとした。

2. 方法

2.1. 第1段階

本研究では図1のステップをランニングマンと定義した。ランニングマンのステップを評価する項目を検討するため、ダンス指導者5名（指導歴：12.2 ± 4.8年）が内容妥当性を検討し、「上肢の動き」に関する2項目、「体幹の動き」に関する4項目、「下肢の動き」に関する6項目、「ステップ」に関する7項目、および「リズム」に関する3項目の計22項目を選択した（表1）。なお、前述の

各要因名は項目選択後に設定した。

2.2. 第2段階

ダンス経験者11名（ダンス歴：3.9 ± 3.4年）およびダンス指導者9名（指導歴：8.8 ± 5.9年）の計20名が、第1段階で選択された22項目について、「a. 適切である」、「b. 適切でない」および「c. わからない」のいずれかで回答した。なお、調査票にはライスケールとして、ランニングマンの成熟度が高い人の内容と反した3項目を加えた（表1参照）。解析には適合度の検定を行い、有意差が認められた場合は、多重比較検定を行った。本研究では、「a. 適切である」の回答が有意に多かった項目を、ランニングマンのステップの成熟度の評価に有効な項目とした。統計的仮説検定の有意水準は5%とし、Bonferroniの方法により有意水準を管理した。

2.3. 第3段階

第3段階では、第2段階で選択された9項目について、信頼性および客観性の検討を行った。そのため、事前にダンス経験者20名および大学でダンスの授業を受講する大学生30名（過去の学校体育以外でダンス経験を有さない）の計50名にランニングマンのステップを実施してもらい、それを1台のビデオカメラ（GC-YJ40；株式会社JVCケンウッド）で側面から撮影した（図1参照）。

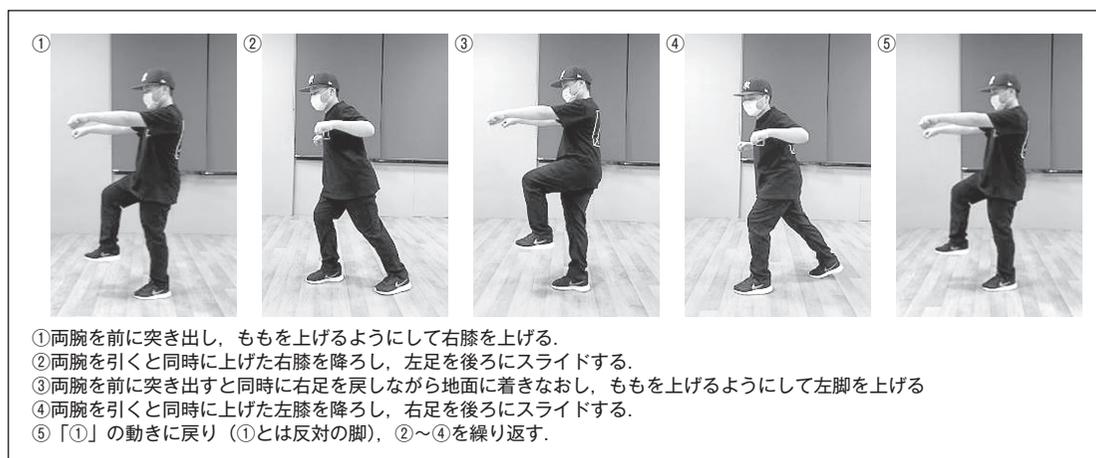


図1 ステップの方法

信頼性は、調査項目を複数回回答した際の一致度を表している(出村, 2007)。本研究では、信頼性は、ダンス歴10年のダンス指導者1名(検者A)が前述の被験者のステップの動画を異なる日に観察する再テスト法により日間信頼性を検討した。なお、記憶効果を除去するために、動画の再生順は1回目と2回目で異なるようにした。客観性は、複数の検者の評価の一致度により検討される(出村, 2007)。本研究では、検者Aおよびダンス歴12年のダンス指導者1名(検者B)の2名が被験者50名の動画を観察した際の、評価の一致度(検者間信頼性)により検討した。本研究成果を学校現場で応用するためには、熟練者だけでなく、非熟練者の評価も考慮する必要がある。しかし、本研究で設定した各項目において熟練者間の客観性が低い場合、個々で判定が異なる項目と解釈されるため、項目として不適切である。本研究は、生徒のダンス評価に関する新たな試みであることから、「ダンスの指導経験を有する者が如何なる評価を行うのか」について検討することとした。

信頼性および客観性の検討には、評価の一致の程度(完全一致率:P)から偶然による一致を取り除いた一致度の指標であるCohenの κ 係数を算出した。統計的仮説検定の有意水準は5%とした。なお、 κ 係数は、Lyden and Lau (1991)の報告に基づき、0.41~0.60は中程度、0.61~0.80は高い、0.81~1.00は非常に高いと解釈した。

2.4. 研究倫理

上述の研究実施に先立ち、研究計画について、福井工業大学における人を対象とする研究倫理審査委員会による承認を得た(人-2018-21)。

3. 結果

表1は、第1段階で選択されたランニングマンの評価項目に関する解析結果を示している。適合度の検定結果、25項目中20項目に有意性が認められた。項目A, B, G, I, K, Q, R, SおよびWの9項目は、75.0%から95.0%の者が適切と回答した。項目TおよびYの2項目は、75.0%の者が適切でないとして回答した。なお、項目O, TおよびYの3項目はライスケールとした。

表2は、第2段階で選択されたランニングマンの評価項目の信頼性に関する解析結果を示している。いずれの項目も完全一致率は高かった(P: 0.78~0.90)。全ての項目に有意性が認められ、項目1($\kappa=0.29$)以外の8項目は、 κ 係数が中程度以上であった($\kappa: 0.53\sim 0.80$)。

表3は、第2段階で選択されたランニングマンの評価項目の客観性に関する解析結果を示している。いずれの項目も完全一致率は中程度以上であった(P: 0.50~0.92)。項目1, 2, 4, 6, 8および9の6項目に有意性が認められ、4項目(2, 4, 6および9)の κ 係数は中程度以上であった($\kappa: 0.51\sim 0.72$)。

表1 第1段階で選択されたステップの評価項目の適切性に関する解析結果(第2段階)

要因	項目	a. 適切		b. 不適切		c. 不明		χ^2	多重比較検定
		n	%	n	%	n	%		
上肢	A. 腕や肩に余計な力がはいていない	16	(80.0)	1	(5.0)	3	(15.0)	19.89*	b, c < a
上肢	B. 腕を前に突き出して引く動作ができています	15	(75.0)	2	(10.0)	3	(15.0)	15.69*	b, c < a
体幹	C. 脚を下す際、上半身はほぼ真っ直ぐである	7	(35.0)	11	(55.0)	2	(10.0)	6.09*	
体幹	D. 脚を上げる際、前傾姿勢である	10	(50.0)	7	(35.0)	3	(15.0)	3.69	
体幹	E. 首、胸のアイソレーションが使えている	13	(65.0)	3	(15.0)	4	(20.0)	9.09*	
下肢	F. 腕を上げる際、膝が腰の位置まで上がっている	14	(73.7)	4	(21.1)	1	(5.3)	13.94*	c < a
ステップ	G. その場でステップができています	16	(80.0)	1	(5.0)	3	(15.0)	19.89*	b, c < a
ステップ	H. 脚のステップが左右同じバランスでできています	13	(65.0)	3	(15.0)	4	(20.0)	9.09*	
下肢	I. 前脚、後脚、それぞれスライドができています	17	(89.5)	1	(5.3)	1	(5.3)	25.63*	b, c < a

リズム	J. 足音がバタバタしていない	13 (65.0)	3 (15.0)	4 (20.0)	9.09*	
ステップ	K. ステップにバネがある	15 (75.0)	0 (0.0)	5 (25.0)	17.49*	b, c < a
下肢	L. つま先の向きが正面である	11 (55.0)	6 (30.0)	3 (15.0)	4.89	
ステップ	M. 一本線の上でステップを踏むよう、 真っ直ぐステップができています	13 (65.0)	4 (20.0)	3 (15.0)	9.09*	
体幹	N. 腰の位置が上下のみに動いている	10 (50.0)	7 (35.0)	3 (15.0)	3.69	
—	O. ステップをしながら前に移動できている †	4 (20.0)	12 (60.0)	4 (20.0)	6.39*	
下肢	P. 脚を上げる際、軸足が身体の真下に位置している	9 (47.4)	4 (21.1)	6 (31.6)	1.94	
リズム	Q. リズムキープができています	18 (90.0)	1 (5.0)	1 (5.0)	28.88*	b, c < a
リズム	R. アップとダウンのリズムがとれている	19 (95.0)	1 (5.0)	0 (0.0)	34.28*	b, c < a
ステップ	S. 全体的に動作が大きい	18 (90.0)	0 (0.0)	2 (10.0)	29.18*	b, c < a
—	T. アップのリズムだけがとれている †	1 (5.0)	15 (75.0)	4 (20.0)	16.29*	a < b
ステップ	U. 全体的に飛ぶようにステップをしている	5 (25.0)	12 (60.0)	3 (15.0)	6.69*	
下肢	V. 脚を上げる際、軸脚を一度で後ろまで引く	6 (31.6)	6 (31.6)	7 (38)	0.14	
ステップ	W. 一つ一つのステップが明確である	16 (80.0)	0 (0.0)	4 (20.0)	20.78*	b, c < a
下肢	X. 引き脚が浮かずに動かしている	12 (60.0)	3 (15.0)	5 (25.0)	6.69*	
—	Y. つま先の向きが外に向いている †	2 (10.0)	15 (75.0)	3 (15.0)	15.69*	a, c < b

note) *: $p < \alpha = 0.05/25 = 0.002$, †: ライスケール (要因名なし: -), 網掛け: 第3段階で用いる項目

表2 信頼性に関する解析結果 (第3段階)

		2回目				P	κ
		a. はい		b. いいえ			
		n	%	n	%		
1. 腕や肩に余計な力が入っていない	1回目	a. はい	40 (80.0)	0 (0.0)		0.84	0.29*
		b. いいえ	8 (16.0)	2 (4.0)			
2. 腕を前に突き出して引く動作ができています	1回目	a. はい	36 (72.0)	5 (10.0)		0.88	0.65*
		b. いいえ	1 (2.0)	8 (16.0)			
3. その場でステップができています	1回目	a. はい	31 (62.0)	3 (6.0)		0.84	0.62*
		b. いいえ	5 (10.0)	11 (22.0)			
4. 前脚、後脚、それぞれスライドができています	1回目	a. はい	25 (50.0)	4 (8.0)		0.90	0.80*
		b. いいえ	1 (2.0)	20 (40.0)			
5. ステップにバネがある	1回目	a. はい	19 (38.0)	6 (12.0)		0.78	0.56*
		b. いいえ	5 (10.0)	20 (40.0)			
6. リズムキープができています	1回目	a. はい	30 (60.0)	8 (16.0)		0.80	0.53*
		b. いいえ	2 (4.0)	10 (20.0)			
7. アップとダウンのリズムがとれている	1回目	a. はい	20 (40.0)	9 (18.0)		0.78	0.57*
		b. いいえ	2 (4.0)	19 (38.0)			
8. 全体的に動作が大きい	1回目	a. はい	10 (20.0)	2 (4.0)		0.86	0.65*
		b. いいえ	5 (10.0)	33 (66.0)			
9. 一つ一つのステップが明確である	1回目	a. はい	14 (28.0)	5 (10.0)		0.86	0.70*
		b. いいえ	2 (4.0)	29 (58.0)			

note) *: $p < 0.05$, 網掛け: $\kappa > 0.40$

表3 客観性に関する解析結果(第3段階)

			検者B				P	κ
			a. はい		b. いいえ			
			n	%	n	%		
1. 腕や肩に余計な力が入っていない	検者A	a. はい	17	(34.0)	23	(46.0)	0.54	0.23*
		b. いいえ	0	(0.0)	10	(20.0)		
2. 腕を前に突き出して引く動作ができています	検者A	a. はい	41	(82.0)	4	(8.0)	0.92	0.67*
		b. いいえ	0	(0.0)	5	(10.0)		
3. その場でステップができています	検者A	a. はい	34	(68.0)	15	(30.0)	0.70	0.08
		b. いいえ	0	(0.0)	1	(2.0)		
4. 前脚, 後脚, それぞれスライドができています	検者A	a. はい	25	(50.0)	3	(6.0)	0.86	0.72*
		b. いいえ	4	(8.0)	18	(36.0)		
5. ステップにバネがある	検者A	a. はい	7	(14.0)	2	(4.0)	0.60	0.20
		b. いいえ	18	(36.0)	23	(46.0)		
6. リズムキープができています	検者A	a. はい	36	(72.0)	6	(12.0)	0.84	0.51*
		b. いいえ	2	(4.0)	6	(12.0)		
7. アップとダウンのリズムがとれている	検者A	a. はい	4	(8.0)	0	(0.0)	0.50	0.12
		b. いいえ	25	(50.0)	21	(42.0)		
8. 全体的に動作が大きい	検者A	a. はい	8	(16.0)	9	(18.0)	0.74	0.38*
		b. いいえ	4	(8.0)	29	(58.0)		
9. 一つ一つのステップが明確である	検者A	a. はい	18	(36.0)	10	(20.0)	0.78	0.57*
		b. いいえ	1	(2.0)	21	(42.0)		

note) *: $p < 0.05$, 網掛け: $\kappa > 0.40$

4. 考察

学校体育において、ダンスの経験が少ない体育教員は、指導および評価に対して不安を抱えており、構成や振り付け、および即興表現を含めたダンス全体を評価することは困難である。つまり、技や全体構成について「上手」や「下手」といった主観的な認識をすることが多く、それらの成熟度を適切に評価することは困難と考えられる。よって、誰もが共通の理解を持ち、評価ができるような項目を作成することが求められる。本研究では、ヒップホップダンスにおけるランニングマンのステップに着目し、動作の成熟度を簡便に評価するための項目を検討することを目的とした。

内容妥当性を考慮して設定した25項目についてダンス経験者および指導者20名に適切であるか否かを検討してもらった結果、「適切である」の回答が多かったのは、表1における項目A, B, G, I, K, Q, R, SおよびWの9項目であった。特に、項目Q(リズムキープができています)、項

目R(アップとダウンのリズムがとれている)、および項目S(全体的に動作が大きい)は、「適切である」の回答率が高く(90.0%~95.0%)、認識しやすい項目であったと解釈される。一方、項目U(全体的に飛ぶようにステップをしている)は60.0%の者が「適切でない」と回答していた。ランニングマンでは、下半身のステップングに上半身の動作が加わるため、視覚的に大きな動作となる。そのため、「飛躍・跳躍」をイメージして「飛ぶ」の表現を用いたが、動作の認識に個人差が生じたと推察される。同様に、項目D(脚を上げる際、前傾姿勢である)、項目N(腰の位置が上下のみに動いている)、および項目V(脚を上げる際、軸脚を一度で後ろまで引く)に関しても、回答率に有意性は認められなかったものの、動作が認識しにくい内容であったと解釈される。特に項目Dについては、前傾姿勢の程度に関する明記がないため、適切な評価は困難かもしれない。以上のことから、「適切である」と回答された項目は、動

作がイメージし易い内容であったと解釈された。なお、60.0%以上の者が「適切でない」と回答した項目 O (ステップをしながら前に移動できている)、項目 T (アップのリズムだけがとれている) および項目 Y (つま先の向きが外に向いている) は、ライスケール (ランニングマンの成熟度が高い人の内容と反した項目) として設定した項目であった。学校体育におけるリズム系ダンスの評価項目として、「①リズムの特徴をとらえる (ヒップホップではダウンやアップの縦ノリ)」、「②連続した動き (気持ちと動きが途切れることなく、曲のリズムと一体となって続けて踊っているか)」および、「③変化と対応の仕方 (動きにアクセントをつけたり、素早い動きやストップなどのリズムに変化をつけたりして踊っているか)」が挙げられる (文部科学省, 2017)。本研究において、①に該当するのは項目 Q および R, ②に該当するのは項目 B, G, I, および W, ③に該当するのは項目 A, F, K, および S と考えられる。これらはヒップホップダンスの評価項目として適切であることが示唆された。

各項目の信頼性を検討した結果、表 2 における項目 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, および 9 の 8 項目は完全一致率が高く (P: 0.78~0.90), いずれも κ 係数は中程度以上であった (κ : 0.53~0.80)。一方、項目 1 (腕や肩に余計な力が入っていない) の完全一致率は高かったものの (P = 0.84), κ 係数は低かった ($\kappa = 0.29$)。木塚 (2011) は、肩周囲に過剰な筋活動が加わると下肢の動作精度は低下すると報告している。つまり、腕や肩に余計な力加わらないことが重要と解釈されるが、本結果より、視覚的判断は困難であることが明らかにされた。

各項目の客観性を検討した結果、表 3 における項目 2, 4, 6 および 9 の 4 項目は完全一致率が高く (P: 0.78~0.92), いずれも κ 係数は中程度以上であった (κ : 0.51~0.72)。特に、項目 2 (腕を前に突き出して引く動作ができていない), および項目 4 (前脚, 後脚, それぞれスライドができていない) については、 κ 係数は高かった (κ : 0.67, 0.72)。項目 2 については、動作の成就が判断しやすく、

同様に項目 4 についても成就の判断が明確であったことから、評価し易かったと考えられる。一方、項目 1, 3, 5, 7 および 8 の 5 項目の完全一致率は中程度以上であったものの (P: 0.50~0.74), 有意性が認められた κ 係数は値が中程度未満であった (κ : 0.08~0.38)。項目 3 (その場でステップができていない) では、両検者の評価の一致度は低かった。「その場」から動いてしまっているかどうかを判断する際、映像では評価が困難であったことが原因と考えられる。項目 7 (アップとダウンのリズムがとれている) では、ステップの開始のタイミングが異なると、その後のアップやダウンにも影響が出るため、オンビートではなく裏取りでリズムをとる被験者やその後に修正してステップする被験者についての評価が困難であったと考えられる。項目 5 (ステップにバネがある) および項目 8 (全体的に動作が大きい) では、簡潔な内容であり、映像での評価がしやすい項目であると仮説を立てたが、検者によって被験者の動作を厳しく評価するか否かで異なる結果となった。

第 2 段階で「適切である」の回答率の高かった項目 1 (腕や肩に余計な力が入っていない) および項目 3 (その場でステップができていない) については、ダンスの経験に関係なく共通の理解が可能な項目であり、信頼性および客観性が高いと仮説を立てたが、客観性について有意性は認められず、仮説は棄却された。いずれも個人のイメージや成就の基準が異なるため、評価にばらつきが生じたと考えられる。これらの項目の信頼性あるいは客観性を高めるためには、「どのような姿勢だと力が入っている状態なのか」、「どの程度までがその場でステップなのか」といった判断基準を定め、検者が理解した上で評価する必要があるだろう。

以上、ランニングマンの評価項目として信頼性および客観性がどちらも高かったのは、項目 2, 4, 6 および 9 の 4 項目であった。なお、ダンス歴を 3 年以上有する 10 名のステップについて、検者 A および B の回答を調べた結果、選択された 4 項目はいずれも「成就できている」と回答していた (検者 A に関しては 1 回目と 2 回目の両方と

も)。つまり、これらの項目は成就度の高い者を判定することが可能である。よって、前述の4項目はランニングマンのステップ評価に利用可能であることが明らかにされ、ステップ指導にも応用可能であることが示唆された。

本研究における信頼性は熟練者1名、客観性は熟練者2名により実施した。学校現場での応用を考慮するため、今後、信頼性については熟練者と初心者のそれぞれで、客観性については熟練者同士、初心者同士、および熟練者と初心者の各パターンで一致度を検討する必要がある。

5. 結語

内容妥当性を考慮した上で選択したランニングマンの評価項目のうち、信頼性および客観性が高かった項目は、「2. 腕を前に突き出して引く動作ができていいる」、「4. 前脚、後脚、それぞれスライドができていいる」、「6. リズムキープができていいる」および「9. 一つ一つのステップが明確である」の4項目であった。

引用参考文献

1. 安達詩穂, 八木ありさ (2017) コンテンポラリー・ダンスのワークショップに参加した児童の内的変化-「自己価値」と『『良いダンス』のイメージ』の変化に着眼して-。日本女子体育連盟学術研究, 33: 1-17.
2. Chatzihidiroglou, P., Chatzopoulos, D., Lykesas, G., and Doganis, G. (2018) Dancing effects on preschoolers' sensorimotor synchronization, balance, and movement reaction time. *Perceptual and Motor Skills*, 125(3): 463-477.
3. 出村慎一 (2007) 健康・スポーツ科学のための研究方法 研究計画の立て方とデータ処理方法. 杏林書院. 東京, pp. 252-264.
4. 石川浩子 (2014) 幼児の発達過程における「現代的なリズムのダンス」. 日本女子体育大学紀

要, 44: 97-103.

5. 春日晃章, 中野貴博, 小栗和雄 (2017) 発育発達期における女子の運動, スポーツ離れに関する基礎研究-女子が進んで取り組むためには何が必要なのか?-。2017年度 笹川スポーツ研究助成, 223-229.
6. 北島奈津, 白井麻子, 伊藤美智子 (2018) ダンス指導の現状と問題点に関する報告~大阪市立中学校教員を対象として~。大阪体育学研究, 49: 81-88.
7. 木塚朝博 (2011) 特集に寄せて「動きを阻害する過緊張や無駄な力」。バイオメカニズム学会誌, 35(3): 156-158.
8. 久保雄一郎, 山口泰雄 (2017) VRを用いたスポーツ・ヘルスケア市場の活性化-EMSとの融合-。スポーツ産業学研究, 27(4): 351-354.
9. Lyden, P.D., and Lau, G.T. (1991) A critical appraisal of stroke evaluation and rating scales. *Stroke*, 22(11): 1345-1352.
10. 文部科学省 (2017) 学校体育実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引. 文部科学省. 東京. pp. 4-7, pp. 43, pp. 165.
11. 中村恭子 (2013) 日本のダンス教育の変遷と中学校における男女必修化の課題. *スポーツ社会学研究*, 21(1): 37-51.
12. 田中望 (2016) 大学生のダンス授業に対する主観的学習評価の性差の検証 -男女共修授業を対象として-. 東海学園大学研究紀要: 自然科学研究編, 20: 31-43.
13. 山口莉奈, 正田悠, 鈴木紀子, 阪田真己子 (2016) ダンス経験のない教員がダンスを教えるために-指導不安の定量化-. *認知科学*, 24(1): 141-145.

2020年8月28日受付

2020年12月11日受理